

## 藤原忠通の句題詩とその背景

——保延五年六月四日の作文会を中心に——

柳 川 響

はじめに

藤原忠通（一〇九七～一二六四）は摂政・関白を務めた忠実の長男で、保安二年（一一二二）に関白となって以降、鳥羽・崇徳・近衛・後白河と四代に亘って摂祿の座に在った。そして、長く政治の中枢で活躍しただけでなく、諸芸にも通じていたことで知られている。忠通は能書家としても名高く、書では法性寺流の祖となり、また、和歌や漢詩については歌合や詩会を多く主催するなど、当時の文壇を主導する存在であった。<sup>①</sup> 忠通には家集『田多民治集』と漢詩集『法性寺殿御集』が現存しており、和歌と漢詩の両方に秀でた人物として白河・鳥羽院政期の文学を考える上で極めて重要な人物と言える。

忠通の漢詩については、平安時代後期の漢詩集『本朝無題詩』に

九十首余りが入るほか、十三世紀初めに藤原孝範が編纂した和製類書『擲金抄』や、鎌倉時代の詩歌集『和漢兼作集』にも詩句が載せられている。また、自撰漢詩集の『法性寺殿御集』は久安元年（一一四五）の歳暮に忠通が過去に自分が詠んだ漢詩から一〇三首を選び出してまとめたものである。<sup>②</sup> 前半は句題詩を中心とした五十四首が春、夏、秋、冬、雑の順に並べられており、後半は無題詩四十九首が載せられている。『法性寺殿御集』に収録されている詩の中には贈答詩もあり、また、同じ詩会で詠まれたと思われる他の文人の詩も残っている。<sup>③</sup> そのため、各詩が詠まれた背景を考えることで、忠通の文学的活動の一端を知ることができると同時に、忠通を中心とする当時の詩壇の実態を明らかにするための貴重な資料にもなり得る。

しかしながら、忠通の詩はこれまであまり研究されておらず、句

題詩に至ってはほとんど読まれてこなかった<sup>④</sup>。それゆえ、現時点では忠通の詩人としての技量や評価については不明確な部分があると  
言わざるを得ない。忠通の詩にどのような特徴があり、どれほど優  
れているかなどを知るためにも、漢詩を実際に読解していく必要が  
ある。

一方で、漢詩の読解においては、他の漢詩文集や日記・記録類な  
ど、様々な資料の情報も併せて検討することが重要である。一首の  
漢詩から得られる情報は限られており、必ずしも詠作の時期や背景  
を知る手掛かりが明示されるわけではないからである。そのため、  
日記などに残る作文会の記録は、時や場所、参加者、作法など、実  
際の文芸空間がどういうものであったかを知るための有益な材料と  
なる。

本稿では、『台記』保延五年（一二三九）六月四日条に見える忠  
通主催の作文会の記録を取り上げ、これと突き合わせることで忠通  
の句題詩を、作文会という文芸空間の中で考察していきたい。単純  
な漢詩の読解だけでは把握することのできない、詠詩の背景や詩の  
評価などを併せて考えることで、忠通の詠詩の背景や漢詩の特色な  
ど、文学活動の一端を明らかにしたい。

## 一 保延五年六月四日の作文会について

忠通の弟である頼長（一一二〇～一一五六）の日記『台記』には  
忠通主催の作文会の様子が記されている。

▽『台記』保延五年（一二三九）六月四日条<sup>⑤</sup>

四日（壬子）、依<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>召秉燭之後參<sub>二</sub>博陸。依<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>作<sub>一</sub>□□<sub>（文）</sub>  
□□（綿衣）。題云、看<sub>レ</sub>月自忘暑（以<sub>レ</sub>情為<sub>レ</sub>韻）。文人予・俊  
通・孝能・頼□□・敦任・遠明・成佐・清忠。此般無<sub>二</sub>殿下御作<sub>一</sub>。  
次被<sub>レ</sub>講<sub>二</sub>花□□逢<sub>二</sub>恩賞<sub>一</sub>（各分<sub>二</sub>一字<sub>一</sub>）詩。此詩者春欲<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>講  
之処、依<sub>三</sub>御□□引、今夜被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>披講。雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>春時、又好文  
之□□□□光・宗兼・有光・成佐。今度有<sub>二</sub>殿下御作。予不<sub>レ</sub>獻  
詩。殿下御作胸句云、貴彩不<sub>レ</sub>慙翁子錦、華顏還咲<sub>二</sub>陽紅<sub>一</sub>、  
句云、秦松好爵応<sub>二</sub>餘慶、漢柏良林是累切。此両句滿□感嘆。  
就<sub>レ</sub>中以<sub>レ</sub>胸句為<sub>レ</sub>最。先講<sub>二</sub>成詩<sub>一</sub>之時、殿下頗□吟詠。其  
句云、見<sub>レ</sub>粧如<sub>レ</sub>子非<sub>二</sub>凡種、以<sub>レ</sub>邑事<sub>レ</sub>君勝<sub>二</sub>衆林。是腰句也。月  
詩講師遠明、花詩講師有光、読師□□度敦光也。  
（指カ）（審カ）

保延五年（一二三九）六月四日、頼長は兄で博陸（関白）の忠通  
に召され、秉燭（夕刻）の後に作文会（詩会）に参加した。時に忠  
通は四十三歳で関白、頼長は二十歳で内大臣であった。この日、披  
講された漢詩は「看月自忘暑（月を見て自ら暑さを忘る）」と「花

木逢恩賞（花木 恩賞に逢ふ）」の二首であった。月の詩（看月自忘暑）は頼長以下八人の文人が献じたが、「此般無殿下御作（此の般は殿下の御作無し）」とあることから、殿下つまり忠通の詩は披講されなかったようである。ただし、『法性寺殿御集』には同じ題と韻の詩が収録されている。

次いで、春から延期されていた花の詩（花木逢恩賞）の披講も行われた。藤原敦光らが詩を献じ、今回は忠通の詩もあったが、頼長は詩を献じなかったという。忠通の詩の胸句（頷聯）と腰句（頸聯）はその座にいる文人たちを感嘆させ、特に胸句は最も優れていたという。この詩も『法性寺殿御集』に載せられており、完全な形で詩を読むことができる。

『台記』のこの記事から、頼長以外には公卿の参加はなく、忠通が儒者を中心とする文人を集めて作文会を主催したこと、春から延期されていた作文会の詩が併せて披講されたこと、忠通の詩句が参加者全員から絶賛されたことなど、作文会の背景やその様子が詳しく記されている。それゆえ、以下では忠通の句題詩を読解して分析することで、忠通の作詩の特徴や故事の受容について検討し、さらに、なぜ腰句よりも胸句の方が優れていると評価されたのか考察する。また、読解においては用例を丁寧吟味し、中国と日本の類書や幼学書など、当時の文人たちが参照したであろう諸書の記事にも

注目し、原拠となる中国古典籍との比較を行いながら、忠通の詩句の受容についても検討を行っていく。

## 二 「看月自忘暑」詩の検討

最初に、「看月自忘暑（月を見て自ら暑さを忘る）」の詩を読み解いていく。本詩の題と韻は保延五年六月四日のものと同じため、あるいは何らかの事情で披講されなかった可能性も考えられる。

◇藤原忠通「看月自忘暑（情）」（『法性寺殿御集』「一九」）

看、<sup>レ</sup>月、終宵台上行　月を見て　終宵　台の上を行き  
自然、暑、翫清明　自然　暑を忘れ　清明を翫ぶ

混珠猶有招涼思　珠に混じれば猶ほ招涼の思ひ有るがごとし

類雪更無到熱情　雪に類せば更に到熱の情無し

出望晴天衣暫薄　出でて晴天を望めば衣暫く薄し

入眠暗室汗還生　入りて暗室に眠れば汗還た生ず

餘輝所照皆銷夏　餘輝　照らす所　皆夏を銷す

秋景従今誰欲迎　秋景　今より誰か迎へんと欲せん

## 【大意】

月を見て夜もすがら高殿の上を歩き、自ずと暑さを忘れて清く明

らかな月夜を慰み興ずる。珠のような月の下では（燕の昭王が持つていた懐中すれば酷暑でも涼しいという）招涼の珠があるような気持ちになり、雪のような月を見ると（白居易が心を静めれば涼しくなると詠んだように）全く暑さが至らない心持ちである。外に出て晴れ渡った空の月を見ると暫し衣が薄くなったように涼しく、内に入って月の見えない暗い部屋で眠ると汗が再び出てくるほど暑い。月の余りある光が照らすところはすべて夏の暑さを消す。今から秋になるのをいったい誰が心待ちにしようか。

句題詩では首聯（第一句と第二句）で題目の字をすべて詠み込む必要がある。ここでは第一句に「看」「月」、第二句に「自」「忘」「宵」があり、句題（詩題）の五字がすべて用いられている。月夜に「台の上を行く」という趣向は、劉宋・謝莊の「月賦」に「去燭房、即月殿（燭房を去り、月殿に即く）」（『文選』卷二三）とあるに通じる。また、「清明」（『清く明かなこと』）という表現と併せて考えると、中唐・元稹の「西原賦」には「去時楼上清明夜、月照楼前撩乱花（去りし時楼上清明の夜、月は楼前を照らして花に撩乱す）」（『元稹集』卷一七）とある。

頷聯（第三句と第四句）と頸聯（第五句と第六句）はそれぞれ題字を、その文字から連想する別の語に言い換えて題意を表現する。

頷聯では、「混珠」と「類雪」で「看月」を、「猶有招涼思」と「更無到熱情」で「自忘暑」を表している。具体的に見ていくと、まず、第三句の「珠」と第四句の「雪」は月を表している。「月」を「珠」や「雪」に言い換える例は『和漢朗詠集』に見える。

▽三統理平「禁中翫月」（『和漢朗詠集』卷上・月「三五」）

天山不<sub>レ</sub>弁何年雪、合浦<sub>レ</sub>心迷旧日珠。

ここでは本詩と同じように「雪」と「珠」が対になっており、月をそれぞれ天山（中国西域の山）に降る雪と合浦郡（中国南方の地名）の真珠に喩えている。なお、月を雪に言い換える例は、謝莊の「月賦」にも「柔祇雪凝、円霊水鏡（柔祇雪のごとく凝りて、円霊水鏡のごとし）」とあり、月の光を大地に積もった雪や天が水鏡のように光る様子に喩えている。

「猶有招涼思」は、後秦・王嘉が著した『拾遺記』に見られる燕の昭王の故事を踏まえている。『拾遺記』は早くに亡失し、現行本は梁・蕭綺が再編したものである。

▽『拾遺記』卷四・燕昭王

至<sub>レ</sub>燕昭王時、有<sub>レ</sub>国献<sub>レ</sub>於昭王。王取<sub>レ</sub>瑤璋之水、洗<sub>レ</sub>其沙泥、乃嗟歎曰、自<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>日月以来、見<sub>レ</sub>黑蚌生<sub>レ</sub>珠已八九十遇。此蚌千歳一生<sub>レ</sub>珠也。珠漸<sub>レ</sub>輕細。昭王常懷<sub>レ</sub>此珠、当<sub>レ</sub>陰暑之月、体

自<sub>レ</sub>輕涼。号曰<sub>レ</sub>銷暑招涼之珠也。

『拾遺記』では、燕の昭王が所持した黒蚌の珠について、「昭王常に此の珠を懐けば、隆暑の月に当たり、体自づから軽く涼し。号して銷暑招涼の珠と曰ふなり」とあるように、この珠を懐中すると酷暑の時にも涼しかったという。また、この故事を踏まえた大江匡衡の句がある。匡衡の「避暑対水石（暑を避けて水石に對む）」詩序

には、「班婕妤团雪之扇、代岸風兮長忘、燕昭王招涼之珠、当沙月兮自得（班婕妤が团雪の扇、岸風に代へて長く忘れぬ、燕の昭王の招涼の珠、沙月に当つて自ら得たり）」（『江吏部集』卷上）と見える。砂地に照る月を眺め、燕の昭王の招涼の珠を得たような涼しさを感じるというもので、「月」と一緒に用いられていることも注目される。この句は『本朝文粹』卷八「二三三」や『和漢朗詠集』卷上・納涼「一六二」にも採られているため、和書を介してこの故事を学ぶ機会もあったかと思われる。

四句目の「更無到熱情」は中唐・白居易の詩に基づく表現である。「苦熱題恒寂師禪室（熱に苦しみ恒寂師の禪室に題す）」には「可是禪房無熱到、但能心静即身涼（是れ禪房に熱の到ること無かるべし、但だ能く心静かなれば即ち身も涼し）」（『白氏文集』卷一五「〇八五二」）とあり、心を静めることで体も涼しくなると言っている。

この句は『千載佳句』避暑や『和漢朗詠集』卷上・納涼「一六一」にも引かれている。特に『和漢朗詠集』では、この句は「猶有招涼

思」で示した匡衡の句の直前にあり、注目される。「珠」と「雪」を対に用いていることと併せて、忠通が本詩を作るに当たって『和漢朗詠集』を参考にした可能性が指摘できる。

頸聯では、第五句の「出望晴天」で「看月」を、「衣暫薄」で「自忘暑」を言い換えている。また、第六句の「入眠暗室」で「看月」の反対を、「汗還生」で「自忘暑」の反対を表している。第五句が室外に出て月を見ることで暑さを忘れるのに対し、第六句では逆に室内で眠って月を見ないことで暑さを感じているのである。

尾聯（第七句と第八句）では、月の光が夏の暑さを消すため、秋になるのを待つ必要がないと結んでいる。白居易の「和楊尚書罷相後夏日遊永安水亭兼招本曹楊侍郎同行（楊尚書の相を罷めて後、夏の日、永安の水亭に遊び、兼ねて本曹の楊侍郎を招きて同じく行くに和す）」に「竹亭陰合偏宜夏、水檻風涼不待秋（竹亭に陰合ひて偏に夏に宜し、水檻に風涼しくして秋を待たず）」（『白氏文集』卷六八「三四六二」）とあり、趣向に共通性が見られる。この詩句も『千載佳句』卷上・夏興と『和漢朗詠集』卷上・晚夏「一六八」に見えるため、これらの和書から着想を得た可能性も十分に考えられるのではないだろうか。

## 三 「花木逢恩賞」詩の検討

次に、もう一つの「花木逢恩賞（花木 恩賞に逢ふ）」の詩を読み解いていく。これは保延五年六月四日の作文会で胸句が絶賛された詩である。当時の文人たちがこの句のどういった点を評価したかについても併せて考えてみたい。

◇藤原忠通「花木逢恩賞（探得紅字）」（『法性寺殿御集』「一五」）

逢恩逢賞喜無窮 恩に逢ひ 賞に逢ひ 喜び窮まり無く

花木带荣立箇中 花木は榮を帯び 箇の中に立てり

貴彩不慙翁子錦 貴彩 慙ぢず 翁子の錦に

華顔還咲上陽紅 華顔 還た咲む 上陽の紅を

奏松好爵応餘慶 奏松の好爵 餘慶に応じ

漢柏良材是異功 漢柏の良材 是れ異功なり

愛得濃姿何所比 愛し得たる濃姿 何の比する所ぞ

楊妃專夜意相同 楊貴の夜を専らにせしこと 意は相同じ

## 【大意】

恩に巡り合い、賞に巡り合って喜びは限りなく、花や木は榮譽を帯びてここに立っている。牡丹の花の高貴な輝きは朱買臣が故郷に

錦を飾ったことにも恥じないほど立派で、美人の顔に喩えられる桃の花は上陽宮の宮女の美しい容貌にも勝るほどの美しさである。秦の始皇帝が爵位を与えた松の高く尊い位は今にまで余慶をもたらした漢の武帝が柏梁殿を建てた時に用いられた柏は良材として殊に功名がある。愛でられる艶麗な姿にいつたい何が比肩しようか、いや、何物にも比べられないほどすばらしい。楊貴妃が春の夜に玄宗の寵愛を独り占めたことと同じ心である。

首聯では、第一句で「逢」「恩」「賞」の三字を、第二句で「花」「木」の二字を読み込んでいる。「箇中」は唐代の口語表現であり、「此中」と同じ意味である。<sup>⑦</sup>

領聯と頸聯では題意を違う言葉に置き換えるのが句題詩の方法である。通常、故事を踏まえながら詩題を言い換えていくが、「花木」は双関語であるので、「花」と「木」の二つの意味を持っている。句題詩では第五句と第六句、第七句と第八句というように双関語を領聯と頸聯の中でそれぞれ詠み分けることもあるが、本詩の場合は領聯の二句で「花」を、頸聯の二句で「木」を詠んでいる。

そこで、まず領聯を見ていくと、領聯では「花が恩賞に逢ふ」とを詠んでいる。すなわち、「貴彩」と「華顔」で「花」を、「不慙翁子錦」と「還咲上陽紅」で「逢恩賞」を表現している。

第三句の「貴彩」とは、牡丹の高貴な輝きを意味する。白居易の新樂府「牡丹芳」に「穠姿貴彩信奇絶、雜卉乱花無比方（穠姿貴彩信に奇絶なり、雜卉乱花比べる方無し）」（『白氏文集』卷四

「〇二五二」とある。牡丹の艶やかな姿、高貴な輝きは本当に極めてすぐれていて、群がる草も乱れ咲く花も比べようがない、という意味である。そのため、本詩の「貴彩」は牡丹の花の高貴な輝きを指すことから、「貴彩」の二字で「花」を表していることが分かる。

次に、「翁子錦」の「翁子」は前漢の朱買臣の字である。すなわち、ここでは朱買臣が故郷に錦を飾った故事を踏まえており、「不慙翁子錦」で「逢恩賞」を表している。但し、『漢書』朱買臣伝や、これを引用する故宮本『蒙求』買妻恥醜「二二七」は「錦」ではなく「繡」という言葉を用いていることには注意が必要である。そのため、忠通は他の典拠を参考にした可能性が考えられる。「錦」という言葉に絞って朱買臣の故事を調査すると、梁・劉勰の『文心雕竜』に「買臣負薪而衣錦、相如滌器而被繡（買臣は薪を負へども錦を衣、相如は器を滌へども繡を被る）」（卷九・時序）とあるほか、初唐・李嶠の『百二十詠』の注や『白氏文集』にも用例が見える。

▽『百二十詠詩注』錦「二一六」  
若逢朱太守、不<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>夜遊人。<sub>（注）</sub>一本、漢時朱買臣、會稽人也。為<sub>二</sub>本郡太守。<sub>（注）</sub>帝曰、郷衣錦襦、還<sub>二</sub>故郷<sub>一</sub>矣。史記、項羽

滅<sub>レ</sub>秦、不<sub>レ</sub>都<sub>二</sub>関中<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>還<sub>レ</sub>楚曰、富貴不<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>故郷<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>錦衣夜遊<sub>一</sub>耳。此云太守誤也。

▽白居易「醉後走筆酬劉五主簿長句之贈、兼簡張大・賈二十四先輩昆季」（『白氏文集』卷一二「五八四」）

君不見買臣衣錦還故郷、五十身榮未<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>晚。

李嶠の「錦」の詩の尾聯では、「若逢朱太守、不作夜遊人（若し朱太守に逢はば、夜遊の人と作らざりし）」とあり、朱買臣のことが詠まれている。『百二十詠』の注は唐の張庭芳が付けたものとされるが、ここでは朱買臣と項羽の逸話を引用する際に「錦」という語が用いられており、朱買臣と錦とを結び付ける例として挙げられる。また、白居易の詩にも「君不見買臣衣錦還故郷、五十身榮未<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>晚（君見ずや買臣が錦を衣て故郷に還りしを、五十にして身の榮えたるを未だ晚しと為さず）」とある。現在見られる資料だけで判断することはできないが、忠通が『百二十詠』や『白氏文集』を読んでいた可能性が高いことから、こうした漢籍を介して詩の表現を学んだことは十分に考えられるだろう。

第四句の「華顔」は「貴彩」と対になっており、これも「花」を表す言葉であることが推察される。「華顔」は通常、花の如く美しい容貌を意味し、白居易の「長恨歌」に「雲鬢花顏金步搖、芙蓉帳暖度春宵（雲鬢花顏金步搖、芙蓉の帳暖かにして春宵を度る）」

〔『白氏文集』巻二二「〇五九六」〕などであるように、美人の顔を表す例は多い。しかしながら、ここで美人の顔の意で取ると、「花」を読み落としたことになるため、植物の花の意で考える必要がある。そこで花との関わりで「顔」の用例を探すと、北周・庾信と『百二十詠』の例が参考になるのではないだろうか。

▽庾信「燕歌行」〔『庾子山集』巻五「芸文類聚」巻四二、樂部二・樂府）

桃花顔色好如馬、榆莢新開巧似錢。

▽『百二十詠詩註』桃「三二六」

隱士顔<sub>レ</sub>改、仙人路漸長。（上句注）神仙伝曰、高丘公服<sub>レ</sub>桃花。騰仙也。一本、列仙伝曰、魯女生餌<sub>レ</sub>麻。經<sub>二</sub>八十余年、色如<sub>二</sub>

桃花。

庾信の「燕歌行」に「桃花顔色好如馬（桃花の顔色 好きこと馬の如し）」とあり、また、李嶠の「桃」の詩の第五句「隱士顔<sub>カ</sub>改むべし」の注で「列仙伝」を引用して、「魯女生餌麻。經八十余年、色如桃花（魯女生 麻を餌らふ。八十余年を経るまで、色桃花の如し）」とあり、いずれも桃の花と顔色を結び付けている。すなわち、本来は花のように美しい顔だちとして用いる「華顔（花顔）」を転じて、美人の顔色に喩えられる桃の花の意味で用いていると考えられる。なお、日本漢詩では紀長谷雄の「春雨洗花顔（春雨 花顔を

洗ふ）」詩に「柳眼剪波春黛綠、桃顔流汗宿粧紅（柳眼 波を剪つて 春黛綠なり、桃顔汗を流して宿粧紅なり）」（『新撰朗詠集』巻上・兩「七四」）とあり、詩題の「花顔」（＝美人の顔）を表す言葉として「桃顔」という語を用いている。今直ちに典拠を確定することはできないが、『百二十詠』や『新撰朗詠集』などの表現に着想を得て、桃の花の意味で「華顔」の語を用いたのかもしれない。いずれにしても、具体的な花の名を用いずに別の言葉で言い換える手法は忠通の技巧的な詩作の一面を表していると思われることができる。

さらに、第四句の「還咲」という表現に関連して、「笑」や「咲」という語が桃との関わりの中で用いられている例を指摘することができる。

▽『百二十詠詩註』桃「三二六」

含<sub>レ</sub>風如<sub>二</sub>咲臉<sub>一</sub>、裏<sub>レ</sub>露似<sub>二</sub>啼粧<sub>一</sub>。（張庭芳注）言桃花向<sub>レ</sub>風則開、如<sub>二</sub>咲臉<sub>一</sub>也。裏<sub>レ</sub>露則濕、如<sub>二</sub>人之啼粧<sub>一</sub>。

▽白居易「勸酒」〔『白香山詩集』巻三九（『文苑英華』巻三三六）松篁薄暮亦棲<sub>レ</sub>鳥、桃李無<sub>レ</sub>情還<sub>レ</sub>笑<sub>レ</sub>人。

李嶠の「桃」の詩の頷聯では「含風如咲臉、裏露似啼粧（風を含みて咲める 臉の如く、露を裏んで啼ける粧に似る）」とあり、その注に「言桃花向風則開、如咲臉也。裏露則濕、如人之啼粧（言ふところは桃花風に向かへば則ち開き、咲める臉の如きなり。露を裏



めば則ち濡りて、人の啼ける粧の如し」と見える。「桃花」と「咲む」が結び付いた例として本詩に影響を与えた可能性もあつて興味深い。また、白居易の「勸酒（酒を勸む）」という詩には「松篁薄暮亦棲鳥、桃李無情還笑人（松篁薄暮に亦た鳥を棲ましめ、桃李情無く還た人を笑ふ）」とあり、こちらも「桃」と「還笑」という表現上の類似性が指摘できる。

「上陽紅」は上陽宮の宮女の美しい顔立ちの意である。白居易の新樂府「上陽白髮人」に「上陽人、紅顏暗老白髮新。綠衣監使守宮門。一閉上陽多少春、（上陽の人、紅顏暗く老いて白髮新たなり。綠衣の監使 宮門を守る。一たび上陽に閉ざされてより多少の春ぞ）」（『白氏文集』卷三「〇一三二」）とあるに拠る。第三句と併せて、頷聯は白居易の影響が大きいことが指摘できる。

一方、頷聯では「木が恩賞に逢ふ」ことを詠んでいる。すなわち、「秦松」と「漢柏」が「木」を、「好爵応餘慶」と「良材是異功」が「逢恩賞」を言い換えている。

まず、第五句は秦の始皇帝が松の下に雨宿りし、五大夫の爵位を与えた故事を踏まえる。『史記』秦始皇本紀・始皇二十八年では「下、風雨暴至、休於樹下、因封其樹為五大夫（下らんとして、風雨暴かに至り、樹下に休み、因りて其の樹を封じて五大夫と為す）」とあり、単に樹下に休んだと記すだけであるが、『芸文類聚』に引

く後漢・応劭の『漢官儀』などに、その木が松であったことが記されている。

▽『芸文類聚』卷八八、木部上・松

漢官儀曰、秦始皇上封太山、逢疾風暴雨。頼得松樹、因復其道。封為大夫松也。

▽『芸文類聚』卷八八、木部上・松

泰山記、岱宗小天門、有秦時五大夫松在。

また、『百二十詠』の注では『史記』を引き、五大夫の松の故事を記している。

▽『百二十詠詩註』松「三二」

鶴栖君子樹、風扶大夫枝。（下句注）史記曰、秦始皇封大山。

逢風雨、乃隱松樹。後遂封五松、為大夫樹也。

李嶠の「松」の詩の第四句に「風扶大夫枝（風は大夫の枝を扶ふ）」とあり、その注で「史記曰、秦始皇封大山。逢風雨、乃隱松樹。後遂封五松、為大夫樹也（『史記』に曰はく、秦の始皇大山に封ず。風雨に逢ひ、乃ち松樹に隱る。後に遂に五松を封じて、大夫の樹と為すなり）」と見える。<sup>9)</sup>

なお、本詩の「好爵」は松が与えられた五大夫の爵位を指すが、本来は高官厚祿のことを言う。例えば、東晋・陶淵明の「辛丑歲七月赴飯還江陵夜行塗口（辛丑の歲七月、赴飯して江陵に還らんとし

て、夜、塗口に行く」に「投冠旋旧墟、不為好爵榮（冠を投じて旧墟に旋り、好爵の為に榮がれざらん）」（『陶淵明集』卷三）とあるが、白居易の「代書詩一百韻寄微之（書に代ふる詩一百韻、微之に寄す）」にも「既在高科選、還從好爵糜（既に高科の選に在り、還た好爵の糜に從ふ）」（『白氏文集』卷二三「〇六〇八」とあり、忠通における白詩の受容とも考えられる。

次に、第六句は漢の武帝が築いた柏梁台の故事を踏まえている。そもそも、松と柏は『史記』龜策列伝に「松柏為百木長。而守宮闕（松柏は百木の長たり。而して宮闕を守る）」（『芸文類聚』卷八八、木部上・松にも引かれる）とあり、百木の長とされる。また、『芸文類聚』所引の『漢武故事』には、「柏梁台高二十丈、悉以柏、香聞数十里（柏梁台は高さ二十丈、悉く柏を以てし、香り数十里に聞く）」（卷八八、木部上・柏とある。このように香りが良く、木としてすぐれていたのが柏であった。

他方で、『芸文類聚』などに見えるように、柏梁台が落成した時に、武帝が群臣を集めて各人に七言一句を作らせ、連句を行ったという伝承も有名である（卷五六、雜文部二・詩）。これは柏梁体とも呼ばれ、最古の連句と伝えられている。『百二十詠』では、李嶠の「詩」詩の首聯に「都尉双鳧遠、梁王駟馬來（都尉 双鳧遠し、梁王 駟馬來る）」とあり、第二句の注に「漢書、武帝宴柏梁台。詔

群臣賦七言詩。曰、王驂駟馬從梁來。統連句也。（『漢書』に、武帝 柏梁台に宴す。群臣に詔して七言の詩を賦せしむ。曰はく、王驂駟馬梁より來る、と。連句続くなり。）」と見える。すなわち、本詩の第六句は、「良材」に武帝のすぐれた群臣たちの意を響かせながら、柏梁台の材木として使われた柏のすぐれた功績を讀める内容として解することができる。

最後に、本詩の尾聯では再び白居易の影響が色濃く見られる。まず、「濃姿」は艶麗な姿の意であるが、『文苑英華』卷三三七所収の白居易の「牡丹芳」に「濃姿貴彩信奇絶、雜卉乱花無比方（濃姿 貴彩 信に奇絶なり、雜卉 乱花 比べる方無し）」とあり、「貴彩」と併せて「濃姿」が用いられている。<sup>10</sup> すなわち、第七句は再び牡丹のイメージを重ねることで、題目の「花」を表していると考えることができるとができる。

また、「何所比」という表現は唐詩に数例見えるだけであるが、その一例が白居易の詩である。「和分水嶺詩（分水嶺に和する詩）」には「所以贈君詩、將君何所比（所以に君に贈る詩、將た君何の比する所ぞ）」（『白氏文集』卷二「〇一一〇」とあり、注目される。さらに、第八句の「楊妃專夜」は「長恨歌」に「承歡侍宴無閑暇、春從春遊夜專夜（歡を承け宴に侍して閑暇無し、春は春の遊びに從ひ夜は夜を専らにす）」（『白氏文集』卷二二「〇五九六」とあるに

拠る。楊貴妃が玄宗の寵愛を受けるさまを指しているが、ここでは楊貴妃の「楊」を詠み込むことで、題目の「木」を表している。

本詩は全体として白居易の影響が顕著な句題詩であったが、胸句と腰句を比較すると、胸句では花の名前を明示することなく「花」を表しているのに対し、腰句では松や柏といった木の名前を直接詠み込んでいることが指摘できる。胸句においてより複雑で高度な言い換えを行ったところに、胸句の方が評価された一因があるのではないだろうか。

おわりに

以上のように、『台記』保延五年六月四日の作文会の記事と、忠通の句題詩二首を読み解いてきた。日記などに残る作文会の記録は、単に漢詩を読解するだけでは知り得ない詠詩の背景や参加者とその役割、詩の評価、作法など様々な情報をもたらしてくれる。一方で、漢詩一首を完全な形で読むことで、摘句だけでは把握し得ない詩の全体像を窺い知ることができる。そして、詩の表現の用例や特徴を詳細に分析することで詩人の知識や技量、さらには背景にある学問基盤を考察する手立てとすることができるのである。それゆえ、漢詩を日記などの記録を合わせて読むことで、漢詩を単線的ではなく、作文会という文芸空間の中でより多角的に理解することができる。

藤原忠通の句題詩とその背景

るのである。

今回は忠通の句題詩を二首読み解いたに過ぎないが、忠通において白居易の影響が強く見られること、また、『百二十詠』や『和漢朗詠集』、『新楽府』など幼学書が多く用いられている可能性が指摘できる。詩の読解においては原拠の調査にとどまらず、それ以外の幼学書や類書などを精査することも重要である。そして、詳細に用例を追っていくことで当時の文人たちが何を読み、何に拠って詩を学んだか、文学的活動の背景を明らかにすることができるのである。

注

\*引用した本文は『台記』は史料纂集、『法性寺殿御集』は尊経閣叢刊、『文選』は『宋尤表刻本文選』（国学基本典籍叢刊）、『元稹集』『庾子山集』『陶淵明集』は中国古典文学基本叢書、『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』は和歌文学大系、『拾遺記』は古体小説叢刊、『江吏部集』は群書類従、『白氏文集』は『宮内庁所蔵那波本白氏文集』（勉誠出版、二〇二二年）、『文心雕竜』は新釈漢文大系、『百二十詠詩注』は『日藏古抄李嶠詠物詩注』（上海古籍出版社、一九九八年）、『白香山詩集』は四庫全書、『史記』『芸文類聚』『漢書』は中華書局、『文苑英華』は中華書局影印、故宮本『蒙求』は『蒙求古註集成』上巻（汲古書院、一九九〇年）に拠り、傍線・波線・傍点を付し、適宜、句読点を私に改めた。なお、引用文の（～）は割注を表す。

① 柳川響『藤原忠通の文壇と表現』（小峯和明監修『シリーズ 日本文学の展望を拓く』第四巻 文学史の時空、笠間書院、二〇一七年）参照。

② 佐藤道生『法性寺殿御集』考（『平安後期日本文学の研究』笠間書院、二〇〇三年）参照。

③ 例えば、『中右記』長承四年（一二三五）三月二十三日条には忠通主催の作文会があり、藤原宗忠の作った絶句が載せられている。その時の詩題は「養生不若花」で、韻字は春であったが、同題同韻の詩が『法性寺殿御集』「十二」に入るほか、藤原頼業と藤原永範の摘句が『和漢兼作集』巻二・春部中にも載せられている。

④ 忠通の漢詩は、本間洋一『本朝無題詩全注釈』一～三（新典社、一九九二～四年）や佐藤道生『法性寺殿御集』考」など、無題詩を中心に研究がなされてきた。

⑤ 引用した本文は史料纂集に拠る。なお、掲出した傍書もすべて史料纂集に付されたものである。

⑥ 句題詩については、佐藤道生『句題詩論考——王朝漢詩とは何ぞや』（勉誠出版、二〇一六年）に詳しく論じられている。

⑦ 塩見邦彦『唐詩口語の研究』（中国書店、一九九五年）参照。

⑧ 『漢書』朱買臣伝に「上謂買臣曰、富貴不<sub>レ</sub>婦<sub>二</sub>故郷<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>衣<sub>レ</sub>繡<sub>レ</sub>夜行<sub>一</sub>。今子何如」とあり、故宮本『蒙求』買妻恥離「二二七」に「上謂買臣曰、富貴不<sub>レ</sub>婦<sub>二</sub>故郷<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>衣<sub>レ</sub>繡<sub>レ</sub>而夜行<sub>一</sub>。今子何如」とある。

⑨ 山崎明、ブライアン・スタインガー「百二十詠詩注校本——本邦伝存李嶠雜詠注——」（『斯道文庫論集』五十、二〇一六年二月）の校異に拠れば、注の「後遂封五松、為大夫樹也」は天理大学附属天理図書館蔵本では「後遂封松、為五大夫樹也」に作るようである。

⑩ 「濃」の字は、神田本『白氏文集』では「濃」に作る。ただし、太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』（勉誠社、一九八二年）の校勘記に拠れば、東洋文庫本・小汀本・東大国研本は「濃」に作るようである。『白氏文集』の諸本の中に「濃姿」とする本文があったことは注

目される。

〔付記〕二〇一六年十二月三日、二〇一六年度早稲田大学国文学会秋季大会（於早稲田大学）で「藤原忠通の漢詩とその背景——『法性寺殿御集』を中心に——」と題して口頭発表したものを加筆修正した。また、本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「平安時代末期の撰閲家における文学と学問の研究——藤原忠通と藤原頼長を中心に——」（課題番号：16J06605）の成果の一部である。